

令和2年度 学校関係者評価報告書

評価点

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	概ね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校(園)名: 広島大学附属三原学校園

分野	重点目標 (評価項目)	年度計画(中期計画・ 中期目標)との関連性	具体的方策	成果指標・判断基準	自己評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策	
					達成状況, 改善策	評価	意見・理由	評価		
教育課程・ 学習指導等	○幼小連携の強化	○昨年度作成した幼小接続カリキュラムを、「光輝(かがやき)」の視点で子どもの実態をもとに再検討し、深化・充実を図る。	○幼小教員が互いの実践参観や、保育・授業実践記録の蓄積を行い、設定している資質・能力やカリキュラム内容の改善・修正を行う。 ○幼小接続カリキュラムを、外部へ提案することができるように精選していく。	○昨年度までに作成した幼小接続カリキュラムをもとにして活動・単元の開発を行い、実践記録をもとに子どもの姿と教師の支援の形でカリキュラムを改善しているか。	○幼小接続カリキュラムを意識した保育・授業実践を行うことができた。幼小教員が定期的に部会を開いて実態を共有することで、カリキュラムの内容を吟味することができ、子どもの姿と教師の姿で大切にしたいことを改善・修正することに繋がった。また、研究会を通して、参会者や講師の意見を取り入れ、より一般化し汎用性のある内容となるよう精選してきた。 ○コロナ禍により、互いの実践参観が十分に行えなかった。オンライン等を用いた実践参観を踏まえて進めていき、よりカリキュラム改善を図っていく。	B	○「光輝」の視点と子どもの実態を元に接続カリキュラムの充実を図っている。 ○幼小カリキュラムを意識した実践がより充実しており、内容の汎用性もさらに精選された。県教委主催の研修の講師を務めるなど、その普及にも務めている。 ○実践記録を再検討し、実態を共有することでより広く、より深く子どもを理解し、その見守りの中で子どもたちは伸び伸びと活動できている。	A	○年度当初に部会で幼小接続期カリキュラムの共通理解を図った上で実践を行い、大切にしたい子どもの姿や教師の姿について、より汎用性のあるものになるよう修正していく。 ○幼小接続期の評価について、エピソード記録の他に効果的な評価方法を検討していく。	
	○小中連携の強化	○各教科の「見方・考え方」の主旨を理解し、教科等を横断する汎用的なスキルを系統的に育成するため、3つの次元(躍動する感性、レジリエンス、横断的な知識)につながる教科の見方・考え方について検討する。	○各教科部会で教科の見方・考え方について検討・集約し、全職員に周知徹底することで、すべての教科の見方・考え方の共通理解を図る。 ○研究授業で、「児童・生徒が見方・考え方を働かせた深い学びになっていたか」についての柱を設け、意見交流を行う。	○各教科の見方・考え方について検討・集約したものを全職員に配布し、共通理解を図ることができたか。 ○「見方・考え方」についての職員の意識変容をアンケートし、授業改善へとつながったか見取る。	○各教科の見方・考え方について、研修会を行い、全職員で共通理解を図った。また、研究授業での子どもの姿を通して、見方・考え方について理解を深めた。 ○コロナ禍の影響で研修会が12月末までかかったため、アンケートにて意識の変容を調べることができなかった。 ○3つの次元につながる、各教科を横断する汎用的なスキルを次年度当初に示すことで、授業改善へとつなげていく。				○各教科の「見方・考え方」の趣旨を理解し、3つの次元との関連性を検討している。 ○コロナ禍の影響もあったが、研究授業を通して見方・考え方の理解が深まった。 ○各教科ごとにこれだけの丁寧なステップを踏んで良い授業が行われたのなら、アンケートは手応えのある結果が期待できると思う。先生方の自信にもつながると思う。	○教科から「光輝」へ、「光輝」から教科への双方向の関連性を見出していく。 ○教科の見方・考え方を活用できる授業のあり方について整理する。また、子どもが無自覚で活用している教科の見方・考え方について、自覚化できるような働きかけについて探る。
	○学力の向上	○卒業後の進路について目標をもたせながら、学力の向上を図る。 ○新型コロナウイルス感染症流行時の学習方法を開発・模索していく。	○自分なりに目標を立てて、学習意欲を高めていけるように、各学級で漢字検定受検啓発や検定に向けた自主的な学習を奨励していく。 ○学習状況を把握するために、年2回総合学力調査を実施し、自覚的に学習に取り組めるようにする。 ○学力差が広がると考えられる高学年において、コース別学習を設定し、全教員で学習支援を行う。 ○週末課題の研究、吟味。 ○各種検定(英語、数学、漢字)の機会の多様化、促進。 ○効果的な実力テストの実施と振り返り。 ○全ての学年(小)・教科(中)でオンライン学習のためのコンテンツを作成する。	○漢字検定受検に全校児童の1/3以上(合計2回の延べ人数)が参加しているか、宿題などで自主的に漢字の学習に取り組んだか。(小) ○1～6年の総合学力調査において、目標値のオールクリア、達成率85%以上、A-D層の差が40以内になっているか。(小) ○第1回目の総合学力調査の結果に見られた課題が第2回目の結果で改善傾向にあるか。(小) ○9年生の実力テストの平均を380点以上とする。 ○9年生の実力テスト平均200点以下を3名以下とする。 ○数学検定で3級以上の資格を持つ生徒を30名以上にする。(中) ○全ての学年(小)・教科(中)でオンライン学習のためのコンテンツを作成できたか。	○コロナ禍のため日程を変更して実施したが、延べ229名(60%超)が漢字検定を受検した。また、子どもが自主的に計画的に学習に取り組む姿が見られた。(小) ○全学年が目標値をクリアした。ほぼ全教科において5ポイント以上目標値を上回った。達成率は、おおむね85%を到達したが、学年・教科によって到達しなかった。A-D層の差40以内についても同様だったので、コース別学習で学年・教科の学習の充実を図りたい。(小) ○第1回目の総合学力調査の結果との比較では、ポイントの上下に一定の傾向は見られなかったが、A-D層の差が縮まった教科は、平均スコアや達成率が上昇した。また、全体的な傾向として、課題である記述問題や書くことについて改善傾向が見られた。(小) ○9年生の実力テストの平均は、390点であり、目標を達成した。歴代最高点である。(中) ○実力テスト平均200点以下については、4名で、やや目標に達成していなかった。(中) ○数学検定、現在27名で、最後の検定結果を加えても若干、到達しない可能性大。(中) ○全ての学年、でオンライン学習のためのコンテンツを作成した。(小) ○全ての教科でオンライン学習のためのコンテンツを作成した。(中)				○各種検定、高学年のコース別学習、効果的な実力テストの実施、オンライン学習のためのコンテンツの作成など、目標を立てて学力向上を図られている。 ○年2回の総合学力調査において、概ね85%到達できたことは評価できる。学年・教科によって到達できなかったことを、マネジメントにより取り組んでほしい。 ○9年生の実力テストにおいて歴代最高点であったことは素晴らしい。 ○全ての教科でのオンライン授業のためのコンテンツを作成されたことの情報をも市教委にも提供してほしい。 ○具体的な数値目標を設定し、子どもたちの自主的・計画的な学習を支えることにより、成果が出ている。 ○具体的な数値目標を設定し、それぞれの習熟度に沿った指導法で全体の学力向上に努力されているのが伺える。教職員一丸となって、取りこぼしのない教育を実践されているのを感じる。9年生の実力テストの歴代最高はそうした日々の積み重ねの結果だと思う。	○今年度の成果をふまえ、引き続き、卒業後の進路に目標を持たせながら、学力の向上に結びつく取組を進めていく。 ○学年・教科による成果と課題を整理し、マネジメントにより組織としての取組をさらに推進していく。 ○オンライン学習のためのコンテンツを継続して作成・蓄積し、有効に活用していく。合わせて、近隣の小中学校へも情報提供をしていく。
教育研究等	○一昨年度から新たに文部科学省の研究開発学校として指定を受けた新領域「光輝(かがやき)」の研究開発	○昨年度までの研究成果と課題に基づき、さらなる研究推進を深め、新領域「光輝(かがやき)」における探究的な学びにつながる資質能力の育成および教科横断的なカリキュラム開発を行う。	○授業実践、リフレクションから、帰納的な過程による資質能力システムおよび光輝(かがやき)カリキュラムの改善を行う。 ○休業中における外部講師を招聘した教員研修会及び学校園内授業研究会を実施する。	○幼稚園では「光輝」視点の保育の実践、小学校においては年間各学年2単元、中学校では各学年最低1単元を実践し、保育・授業公開をして検証できたか。 ○探究的な学びの過程につながる教科横断的な資質能力育成についての成果と課題を実践後に集約できたか。 ○学校園で育成する資質能力システムを各学年で修正できたか。	○各学年ともに、身近な生活上の問題を解決するための「探究」活動を中心とした実践を行うことができた。 ○メタ認知や各教科の見方や考え方について、夏季研修会を実施し、教職員間の共通理解を図った。 ○実践をもとにした「資質・能力システム」の修正や「カリキュラム試案」の作成ができた。 ○概念や方法知に関する「ふり返り活動」や「学習評価」について、検討を進めていく。	A	○新領域「光輝」における実践をもとにした「資質・能力の育成」及び「カリキュラム試案」の作成がなされている。 ○新領域「光輝」における探究的な学びにつながる「資質能力システム」の修正や「カリキュラム試案」の作成など先進的な研究が行われていると考えるが、そのこと、児童生徒が身近な問題を解決するためにどのように「探究」活動と結びつき、児童生徒がどのような力をつけたか、具体的な指標を元に説明がほしい。 ○研究テーマについて計画的に推進できており、カリキュラムの作成に向け、着実に取り組まれている。「探究」の実践がより充実させ、広く普及されることに期待している。	A	○社会とのつながりがあり、内容または資質能力で生活に生かすことのできる「光輝」単元を開発する。 ○子どもとともに目標やつきたい力を設定し、客観的な評価を通して子どもが自己の成長を自覚できるようにする活動・単元を実践する。 ○個別の探究課題がどのようなプロセスをもって設定されていたのかをまとめる。 ○研究の経過及び成果等を積極的に発信していく。	

令和2年度 学校関係者評価報告書

評価点

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	概ね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校(園)名: 広島大学附属三原学校園

分野	重点目標 (評価項目)	年度計画(中期計画・ 中期目標)との関連性	具体的方策	成果指標・判断基準	自己評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
					達成状況, 改善策	評価	意見・理由	評価	
社会連携・ 社会貢献活動等	○広域にわたる地域貢 献拠点校としての役 割・機能の強化	○「希望(のぞみ)」の成果を広く発信しつつ、「光輝(かがやき)」の研究内容と成果等についてわかりやすく発信する。	○文部科学省, 教大協, 全附連や中附連等に幼小中一貫の研究を広く発信する。 ○学会発表や学会誌原著論文, 出版物等によって学内外に発信する。	○公開研究会に代わる方法を工夫し, 広く研究成果を発信していく。(WEB公開を行う) ○学会発表や学会誌原著論文発表を積極的に行っていく。	○WEB公開により, 研究成果を発信した。参加者274名 ○学会での発表(WEB含)5, 出版18により, 研究成果を発表した。	B	○地域貢献拠点校としての役割を果たされている。 ○コロナ禍において, 地域への貢献拠点としての役割には困難な点がいくつかあったことと推察します。WEB公開での274名参加, 学会での発表5, 出版18によつての成果発表の参加者や学会等の反応(評価)はどうだったのかお聞きしたい。	A	○新型コロナウイルス感染拡大の状況等, 社会の状況に応じて, 工夫しながら, 研究と発信を継続し, 地域貢献拠点校としての役割を果たしていく。 ○研究成果の発表と合わせて, それらの評価・反応等についても情報発信ができるよう検討していく。
	○近隣の学校や地域 への社会貢献・連携	○教育委員会並びに県内・市内の幼稚園・小学校・中学校や地域との連携・交流をさらに活性化させる。	○授業づくり研修会(CCL)・保育カンファレンス等, 地域貢献の研究会の実施 ○教育委員会主催の研修会や公立学校等での指導助言者の役割を果たして。 ○管理運営の学習会の定期開催 ○県内・市内の乳幼児教育の拠点としての機能を果たす。 ○子育て支援の取組を継続する。	○研修会を工夫し, オンライン等で発信していく。 ○学校園外での指導助言の機会を積極的に求めていく。 ○学外対象の管理運営の研修会を積極的に実施していく。 ○中止となった研修会・総会等の事後処理を適切に行い, 次年度の活動へ確実につないでいく。 ○「すこやかランド」10月以降, 月1回の開催, 園庭開放等への来園者数年間50名以上	○授業づくり研修会を実施した。(参加者, 県内18名, 県外22名, 海外2名, 学生32名, 計74名) ○講演会講師, 研修会の指導者等を, 延べ14回務めた。 ○学外対象の管理運営の研修会を10回実施し, 公立学校管理職昇任試験1次については全員合格した。 ○WEB及び書面会議等で役員会等を行い, 次年度の活動につないでいる。 ○すこやかランドは実施していない。園庭開放等への来園者数:年間98名		○コロナ禍の中, WEBでの公開を行うなど, 研究と発信を止めない工夫が生かされている。 ○コロナ禍において, 県内・市内の幼稚園, 小学校, 地域との交流には制限があったと思います。今後もさらに連携・交流を進めていきたいと考えます。教育委員会としても連携していきたいと考えております。 ○近隣の学校や地域への社会貢献・連携ができています。		
学校経営・ 安全管理等	○学校園全体の機能 の強化	○エビデンスに基づく目標の設定, 目に見える形のPDCAサイクルの実現。 ○ガバナンスの強化, チーム附属三原としての機能向上。	○分かりやすい数値や検証可能な目標を設定し, PDCAの実現。 ○適切な報連相。 ○行事等の改廃と成果の維持・向上の両立。	○学校関係者評価に数値目標を10以上入れる。 ○報連相の頻度を上げる工夫を具体的におこなう。 ○行事等の改廃に係わつてのフォロー案の作成ができたか。	○数値目標については, 10箇所設定しており, 目標を達成している。 ○コロナ禍の中で行事, 諸活動の中止, 縮小, 延期等の状況が多く続いた。その1つ1つが大きな要素のため, 報連相は自然に, あるいは意図的に加速できた。 ○コロナ対応で中止や縮小した行事が多くなったが, 子どもたちが主体となった新たな行事にチャレンジする機会とすることができた。	A	○学校園全体の機能はコロナ禍の中でも強化できた。 ○コロナ禍の中にあっても, 様々な工夫により, 園児・児童・生徒の活動を広く公開することができ, その過程において子どもたちのチャレンジの機会としても生かされている。	A	○研究面のみでなく, 生徒指導や保護者対応など, 学校運営に対応する組織力やチームワークのあり方を更に進めていく。 ○組織の目標と個人の目標について, さらに意識させ, 目標の連鎖による効果的な学校経営を一層推進していく。 ○新型コロナウイルス感染拡大防止のみに留まらず, 幅広く, 教職員・児童生徒の危機管理意識を高める取組を計画的に進めていく。
	○教職員の学校経営 参画意識の向上	○学校経営計画や学校評価の目標と, 個人業績評価の連鎖を強化する。 ○学校園全体と各組織の機能強化及び主任等の人材育成。	○学校園の経営方針にリンクした個人目標を設定し, 自己点検・評価を行う。 ○主任の主体的な提案。	○個人業績評価の内容により検証する。 ○校務分掌上の主任は, 年一つ以上の業務改善または推進を提案, 実施する。	○上位の目標との連鎖については, 年々, 徹底, 加速できている。 ○提案はやや弱い, 諸活動, 行事等が縮小しているため, 自然, 業務改善となっている。		○教職員の学校経営への参画意識の向上が感じられる。 ○学校経営目標や学校評価の目標と個人目標や個人業績評価との連鎖(リンク)は, 組織として経営していく場合, とても重要なことと考えます。どのように上位目標を個人目標に落とし込まれているのかお聞きしたい。		
	○幼児・児童・生徒・教職員・保護者の安全に関し て関係機関と連携して安全・ 危機管理の体制を確立	○職員の危機管理意識の高揚 ○新型コロナウイルス感染症の危機管理体制の確立。	○新型コロナウイルス感染症の対応について理解し, 文部科学省が発出している通知文について可能なかぎり, 実践していく。	○新型コロナウイルス感染症に対する危機管理の職員研修を実施することができたか。 ○文部科学省が発出している通知文について可能なかぎり, 実践できたか。	○コロナに対する国や自治体, 大学の方針や規則が, 感染状況により, 変わるため, 研修はできた。 ○文部科学省が発出した文書は可能な限り, 読み, 実践した。		○新型コロナウイルス感染症に帯する危機管理体制が, 幼児・児童・生徒・教職員・保護者に浸透している。 ○コロナに関してはもちろんであるが, 折しも3.11から10年の節目に, 「命」の大切さを改めて考える機会を増やしてほしい。		
そ の 他	○教職員の勤務時間 の縮減等	○学校全体としても個人においてもスクラップアンドビルドの考え方を浸透させ, 効果大でエネルギー小の取組を模索していく。 ○ウイズコロナの時代をきっかけに, さらに働き方改革を模索していく。	○学校園の行事や諸活動を見直し学校園の活動の機能強化を図る。 ○早期退校の個人目標の設定。 ○大学での「働き方ワーキング」に積極的な提案をおこない, モデルになるような取組を推進する。 ○テレワークを推奨していく。	○3校種間の早期退校の取り組み交流をおこなう。 ○毎日, 表示しているか。 ○月10時間, 42時間の厳守。 ○学外で提案できるレベルの取組をおこなう。 ○休校中5割のテレワークができたか。	○拡大校園会議, 3副会, 校内安全衛生委員会等で交流を実施している。 ○表示していない人も時々いる。 ○42時間は意識し, それ以内の人が多くなった。 ○校外で提案できるレベルで実践できている。 ○休校中は5割以上のテレワークはできた。	B	○教職員の勤務時間の縮減ができています。月10時間・42時間が守られている。 ○教職員の勤務時間の縮減や働き方改革と, 教育内容の進展・深化や新しい教育内容の取り入れとは両者反目する事が多い。どのようにすれば効果的か, ご示唆があればお聞きしたい。 ○働き方の工夫が必要な状況においても, 取組がさらに充実するよう工夫されている。勤務時間については, 更なる取組により, 年間の目標が達成されるよう期待している。	A	○教育内容, 研究活動の充実と勤務時間の縮減の両立が図れるよう, 更に働き方改革への意識を高め, 工夫・改善を進めていく。 ○引き続き, 幼小中12年間を通して, 幼児・児童・生徒を対象とした教育研究, 及び教育実習にグローバルな視点を導入し, グローバル人材の育成を図っていく。
	○高度な教員養成拠 点校としての役割・機 能	○大学院生のアクションリサーチ実地研究や「教科教育学の実践検証」のフィールドワーク等を積極的に受け入れる。	○大学院生の指導及び共同研究等が, 本学校園の教員の力量・指導力の向上にも資するものと捉えていることを内外に発信する。	○アクションリサーチ実地研究や「教科教育学の実践検証」のフィールドワーク, 共同研究等の依頼に応じたか。	○依頼されたものは, 積極的に受けた。				
	○グローバル人材の育 成	○幼小中12年間を通して, 幼児・児童・生徒を対象とした教育研究, 及び教育実習にグローバルな視点を導入する。	○グローバル関係の行事の活性化 ○外国からの視察等受け入れ ○英語力の向上	○外国からの交流等をオンライン等も含め積極的に受け入れようとしたか。 ○英語検定準2級を40名以上とする。	○本年度はコロナ禍のためオンライン等を含め, 交流依頼が少なかった。 ○ニューヨーク在住のアーティストとオンライン交流(演劇視聴, 児童の音楽会), 外国航路船員さん向けに児童メッセージ動画をアップロード ○英語検定準2級は34名, 最後の検定結果を加えても若干, 目標達成には届かないか。		○グローバル人材の育成を積極的に推進している。 ○グローバル人材に限らず, これからは更に英語は重要となる。英検は数検と同じく学力向上の「担い手」の中に入れても良いのではと思う。		